

研究ノート

落語にみるゝ生きる知恵

増田辰良

目次

- 一・前口上
 二・十一席の落語。時うどん、芝浜、はてなの茶碗・補論、火焰太鼓・補論、鰻の封筒、へつつい幽霊、富久、もう半分、黄金餅、宿屋の富、三方一両損
 三・締めのご挨拶
 参考文献

一・前口上

落語とは、噺家（落語家）と呼ばれる芸人が高座の座布団に一人座って噺（話、咄）を聴かせる日本の伝統話芸です。噺家は座ると、座布団の前に扇子を置き、深々と一礼をします。この扇子が噺家と聴き手との空間を分ける役割をします。

噺家がただしやべっていたのでは落語にはなりません。聴き手がないと成り立ちません。噺家には話芸が求められ、聴き手には想像力が求められます。この話芸と想像力が一体となってはじめて落語はある種の完成域へと近づくのです。ですから、落語が完成するためには噺家と聴き手との知的な協同作業を必要とします。

噺のなかには、様々な社会事象、人間の色々な心理模様の断面が取り込まれています。そのため噺の内容には笑いがあつたり（滑稽噺）、悲しみ、怒り、愛憎があつたり（人情噺）、恐怖があつたり（怪談噺）、偏屈めいたこだわりがあつたり（執心噺）、と人間の喜怒哀楽を含んでいます。これを聴き手が想像力でもって感じ取るわけですから、たとえ噺家が滑稽噺を演じていても聴き手にとっては人情噺であつたり、恐怖噺であつたりします。つまり噺の本旨は聴き手の感じ方、聴き方に依存している側面があります。いずれにしろ、聴き手はそこから生き様ゝ知恵を論されることとなります。一説によれば、落語の起源は僧侶の説教にあるとも言われています。知恵を論される理由がここにあるわけです。

落語と言えば、「笑い」が連想されます。この笑いを考える上で落ち（サゲ）は避けて通れない要素になっています。しかし落ちのない噺もある（『黄金餅』）ことからすれば、落語は笑いと結びつけなくてもよいこととなります。また、同じ落語でも噺の上手いと下手は噺家の技量によるところ大であります。さらに、落語は聴くのと読むのとでは噺家自身からただよってくる「おかしみ」も違ってきます。もち

ろん、寄席で聴くのが格段に愉しいですが。

本稿は、語り継がれてきた古典落語の口演をテープから起こし、文章化した噺を取り上げます。そして、噺家が違っててもその本旨に普遍性のある落語から人の生き様、知恵を探ることに興味があります。それほど人は摩訶不思議な生き物であるからです。

こうした作業は本来、噺の時代考証を前提とします。しかし、本稿ではこれをしません。また、噺家による語りの表現にも違いはありませんが、噺の本旨にのみ関心をよせます。落語家論や演芸評論など多くの学術研究もありますが、それらを参照するにしても最小限にとどめました。いわば、独学、自分自身の眼力で落語の中にある「生きる知恵」を探ってみます。なお、経済学と関係する噺については補論として解説を加えました。

まずは「お金」にまつわる知恵をとりあげます。その前に小噺を二つ、おつきあい願います。

小噺一「足」

「あらア、キュートなミニスカート。よくお似合いよ」

「ありがとウ。でもオ、高くてエ、予算をオーバーしちゃったの」

「そ〜ウ。それで大胆に太モモを出してるのネ」

小噺二「知識」と「知恵」

「お父さん、知識ってなあに？」

「知識というのは見聞を広め教養を身に付けることだよ。お金を貯めることと同じ」

「ふ〜ン。じゃア、知恵ってなあに？」

「知恵っていうのは、その知識、教養をどう使うかを考えて行動する

(11)

ことだよ。貯めたお金を何にどう使うのかを考えて行動することさ」

「う〜ン、知恵について、もっと具体的に教えてよ」

「そうだなア。知恵とは、何か買いたい物があつて、お金が足りないとき、買うのを我慢するとかア、別の安い物にするとかア、…値切るとかア…を色いろ考えることだよ」

「そっかア。じゃア、ゲームのソフトを買いたいので、お小遣いを前借りさせてくれない？」

「おオ、変な悪知恵をつけちゃったかなア」

二. 十一席の落語

一席 時うどん

桂枝雀 (二〇〇六)「時うどん」『桂枝雀 爆笑コレクション4』ちくま文庫。

知識をぎっしり頭に詰め込んでそれを記憶しているだけの人や、前例にこだわる人は臨機応変に自分で考えようとしなから失敗しがちである。この噺は、状況に応じて知識をどう使うか、という知恵が大切であることを教えてくれている。

すじがき

冷え込みの厳しい夜、一杯十六文のうどんを食べるのに二人（アホと清やん）の所持金は八文と七文の合計十五文しかない。そこで、これを絶妙な「息と間」でもって一文ごまかして（支払わずに）食逃げするという噺である。「落ち」はうまく勘定をごまかした清やんの言

動を真似して、アホがスカタンをこいてしまふところにある。

まずは前夜、いよいよ食べ終わり、勘定を払うだんになって、清やんがうどん屋に声をかけます。

《…細かいけど手エ出してんか》

《おおきにありがとさんでござい》

《いくでえ。一つ、二つ、三つ、…、八つと。うどん屋、今、何刻や?》

《確か九つで》

《十、十一、十二、十三、十四、十五、十六と》

と、一文払わずにすませます。

清やんはこの謎を解いてみせ、誰にでもできることではない、とアホを論じます。

《あけへん、あけへん。お前らでけへん。こんなお前、息と間アや。

お前らみたいなぼやとしたの、でけへん》

しかし、アホは自分も試してみようと意気込みます。

《お前にでけて、わいにできんことないわい。わいはやったるで、さいなら》

と、寒くもない次の夜に同じことを試みます。

《よし。昨夜あいつが言いよったとおり、やりよったとおりやったる。ほんだら同じ息と同じ間ンなる》

勘定を払うだんになって、アホがうどん屋に声をかけます。

《昨夜とちよつとも変われへんねん。うどん屋、手エ出してんか》

《へえ、おおきにありがとさんで、ちようだいします》

《…、いくでえうどん屋》

《一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つと。うどん屋、

今何刻や》

《へい、五つです》

《六つ、七つ、八つ…》

と、三文損した。

一知恵

悪知恵のある者は、状況判断がしつかりできていないし、悪事がばれないような状況設定をする。こうして騙される相手にすきをつくらせる。この断では一杯のうどんにまず清やんが箸をつける。すばやく出てきたうどんを褒めちぎる。

《待つ間もなく出てくるて、こいだけでも御馳走やでえ、おおきにあらがと》

次に、

《ええ出汁。出汁がええ。結構やでえ》

最後には麵もシコシコしてて美味いともちあげる。一方で清やんはアホを焦らし、うどんを一本だけ残し、二人の間に巧みに険悪な雰囲気をつくる。その雰囲気にはうどん屋は気をとられる。

清やんは、支払いをする時刻を知った上で、…八つと数えたところで、

《今、何刻や?》

と問いかけ、

《確か九つで》

と、うどん屋に言わせてから、十…と払って、一文ごまかすことに成功している。

一方、アホはこうした状況判断と状況設定のないまま、

《あいつが言いよったとおり、やりよったとおりやったる。ほんだら

同じ息と同じ間ンなる》

と、マニュアルどおりの行動をしてしまふ。

清やんの話術を引き立てたのはアホだけではない。うどん屋も同罪である。金勘定にうるさい商人が演出された雰囲気にもまれ、一文の損をしたのだから。

この噺は二つの視点から読み解くことができる。一つ目は、単純にアホがスカタンをこく滑稽噺と聴くのではなく、前例に従順ではアカン、何でもマニュアル通りに行動すると、とんでもない大損をするので、臨機応変に自分の頭で考え知恵をしぼって行動しなければいけないよ、という戒めの落語として聴くべきであろう。また悪知恵のない者は決して真似をせず、品行方正に生きるべきだということも示唆している。このアホは昨夜、一本のうどんに八文支払い、今夜三文余分に支払ったので合計十一文の損をしている。

二つ目は、うどん屋が損をさせられたことの意味である。普段、小銭をかき集めるようなセコイ商いしかしておらず、一文の損も出さない固い商売をしているはずであるが、それがままと清やんの話術にハマられてしまった。清やんはくそ固い性分のうどん屋に泡を吹かせるこの機会を狙っていたのかもしれない。商売人の知恵として利に聡くあるべきことを教ええられる。

(筆者注。江戸時代後期の商人たちが庶民の風俗を記録した『守貞謔稿』によると、かけ蕎麦は十六文、芝えびの天ぶらを三、四個載せた天ぶら蕎麦は三十二文だったそうです。『朝日新聞』、二〇一八年四月十四日より。)

二席 芝浜

古今亭志ん朝・京須偕充編(二〇〇四)「芝浜」『志ん朝の落語5 浮

きつ沈みつ』ちくま文庫。

飲兵衛で稼ごうとしない亭主を内助の功によって改心させる、という人情噺である。もっぱら内助の功が評価されているが、亭主の知恵は唯一「落ち」において発揮されている。浮き沈みのあるのが人生、それを平衡に保つよう知恵を出し合うのが夫婦である。この噺からは理想的な夫婦関係を教ええられる。

一すじがき

魚の行商人である熊五郎は目利きもよく、腕も立つが無類の飲兵衛で商売に身が入らない。ある朝、女房にたたき起こされ、嫌々、芝の魚河岸へ出かける。ところが一刻も早く着いたため、問屋すら開いていない。熊五郎は浜に下りて眠気を覚まそうと海水で顔を洗う。浜へ戻ろうとするところで財布を拾う。

持ち帰って開けてみると五十両の大金が入っていた。熊五郎は有頂天になり、もう商いはせず、遊んで暮すと言う。女房は機転を利かせ《あたし預かっとうか》と財布を受け取る。そして酒を飲ませて、熊五郎を寝かせてしまう。熊五郎は眼が覚めると、仲間を集めて酒肴を振舞い、また寝込んでしまう。このうちに女房は大家に相談する。《お前はあいつを夢だと言つてごまかせ。騙しちまえ》大家はこう知恵を授ける。

熊五郎は目覚めると、酒を飲んだのは事実だが財布を拾ったのは「夢だ」と知らされる。あげくの果てに女房からはきつく灸をすえられる。《お酒ばかり飲んでるからそういうことになっちゃうの。ええ？》頭がおかしくなっちゃったんだよ！…普段からねエ、商売もしないでお金が欲しい、お金が使いたい、そんなことばかり考えているから、

そういう夢見るんだよ！ …お酒を飲んでいいるから、そういう罰が当たの…》

この言葉で改心し、熊五郎は断酒をして商売に精を出し繁盛する。そして三年後の大晦日、熊五郎は本心を口にする。

《人間てエものはおめえ、働かなくちゃだめだア》

これを聞いて、女房は預かっていた財布を見せ、打ち明ける。ネコババすれば、お縄になると案じ大家に相談し、財布はお上へ届け出たと。落とし主が現れないので、五十両をもらうことができたこと。話し終ると、女房は騙したことを謝り、今夜くらいはよかろうと酒を勧めるが、熊五郎は

《おれ、飲むのよすよ》

《また夢になるといけねエヤ》

と、杯を置く。

〔知恵〕

知恵のない者はもつ者に頼り、それを自分の知恵とすべきである。この点において女房は「酒好きを酒で騙す」という知恵を大家から授けられる。何はさておき、女房がつくウソを熊五郎に信じさせることができたのは、女房が財布を預かったという知恵による。

知恵というものがそれまで貯えてきた知識を使うことであれば、熊五郎の最大唯一の知恵は「落ち」で發揮されている。五十両を拾った現実を祝酒を飲んだが故に夢だと騙された。この騙されたという知識があつたればこそ、改心し断酒によって得た現実の繁栄をもう二度と夢であつて欲しくないという知恵が働き《おれ、飲むのよすよ》《また夢になるといけねエヤ》となつたのであろう。

早起きは三文の得。女房…亭主が二十日ぶりに商いに出てくれるこ

とになつて、女房は神棚に手を合わせ、今日の稼ぎを願掛けしている。熊五郎…魚河岸へ魚を仕入れに出るのが一刻も早かつた。浜に腰を下ろし、昇ってくる《お天道様》を拝む。事実、熊五郎もこれまでのしくじりを《神様が『かわいそうだから熊五郎』『なんとかしてやろう』つてんで：授けてくれた…》と思ひ込む。この偶然の幸いは神様からの最後の慈悲だつたとも読める。この五十両の処理の如何で、夫婦の将来が決まってしまうような。

もう一つの知恵は改心した熊五郎が三年後の大晦日に、お得意回りをしているところにある。

《正月なつてみろよ、おめえ、毎日毎日おせち料理じゃアおめえ、口が飽きるだろう？ 魚でも食いてエと思つてるときにおめえ、魚屋ア休みだア、なア？ そんなとき不自由な思いをお得意にさしちやア申しわけねエと思うから、おれア、昼間のうちに回っちゃつたんだよ》

その大晦日、拾った財布を見せられ、夢ではなかつたこと、騙されていたことを女房から打ち明けられても、ぐつと我慢して、その説明を聞き、女房をなじつたり、叩いたり、蹴つたりはしなかつた。むしろ騙してくれたことに感謝している。《手を合わせ》女房大明神と拝んでいる。これも熊五郎が根っからの愚者ではなく、知者である一面を表現している。

また「落ち」からは夫婦の強い信頼関係を読み取ることができる。熊…《人間てエものはおめえ、働かなくちゃだめだア》これが本心から出た言葉か否か、を試すために女房は酒を勧めたとも読める。女房《もうお前さんは先のお前さんじゃあないもん。ええ？ お酒に飲まれるような人じゃないよ。…一杯おやりよ》

女房は、酒を飲ませても三年前の亭主には戻らないだろうと確信し

ているのかもしれない。あるいは、たとえここで飲んだとしても、以前のように酒に飲まれる生活に戻るんじゃないよ、と諭しているとも読める。知恵が働いて熊五郎も飲まないで、女房の期待に応えた。

三席 はてなの茶碗

桂米朝（二〇〇二）「はてなの茶碗」『桂米朝コレクション4 商売繁盛』ちくま文庫。

この噺からは知者と愚者を読み解くことができる。功なり名を上げている者はそれなりに知恵が備わっている。一方、あさはかな知恵だと諭されても懲りない性分の者もいる。

すじがき

京都清水の音羽の滝のほとりの茶店で、油屋が休んでいると、隣に座っている有名な茶道具屋の金兵衛こと、「茶金」が手に持つ不細工な湯飲み茶碗をこねくり回し、しきりに「はてな？」と首をかしげている。それを見ていた油屋はきつと掘出物に違いないと茶金が帰った後、すったもんだした拳句、茶店の亭主から有り金の二両で買い取り、茶金の店へ持ち込む。

ところが、この茶碗はたかだか十文ほどの代物であると教えられる。茶金と言うにはひび割れもなく、キズもなく、うわ葉に支障もないのどこからか茶が漏れるので「はてな」と首をかしげただけであった。茶金という名前を信用して二両で買ったことを嘆き、がっかりする油屋に茶金は、商人冥利を感じ元値にもう一両を加えた三両を渡す。さらに、掘出物を狙うよりも今の商いを大切にし、真面目に働くよう

諭す。

この話が評判となり、関白、さらには帝が茶碗を手にとって試してみた。感動した関白は歌を添え、帝は「はてな」と箱書きした。このことから一層箔が付き、金満家の鴻池善衛門が千両で買い取ることになる。

茶金は五百両を油屋に分け与える。これに味をしめた油屋は、今度は《水がめの漏るやつを見つけてきた》と「落ち」になる。

一知恵

見る限り、どこにも支障のない安物の茶碗からポタポタと茶が垂れること自体、世に一つという珍品である。しかるべき人が見れば、大金を積んでも欲しがる代物かもしれない。と考えると、それを手にするだけで立ち去った茶金の目利きが疑われる。これに箔をつけたのが関白や帝であり、十文の代物を千両に化けさせた。

それでは茶金の知恵はどこにあるのか。それは油屋が茶金の「はてな？」を誤解し、有り金二両をはたいて、この茶碗を手に入れたいきさつを聞いた後の茶金の返答にある。

《言わば茶金という名前を買っていたいたようなもの。茶金、商人冥利につきます。あんたに損さしてはわしの気がすまん。この茶碗、わたしが買わせてもらいます。》

商売は評判（信用）がすべてである。茶金のこの返答は自分に寄せられる評判を汚したくないという知恵である。こうして元値にもう一両を加えた三両で茶碗を買い取る。

また、茶金とて、一日にして今の名声を得たわけではなく、これまで数多くの失敗もし、また他人のそれを見てきたことから油屋を諭すところにも知恵がある。

《一山当てようてな氣イ起こしたらあきまへんで。ああもう掘出物をしようとして長年、年期を入れた商売人が損するのがこの道や。地道におかせぎやす。それに優るものはなし》

欲張らず、己をわきまえ真面目に働けということである。

茶金は五百両を全て懐にしまったわけではない。少額のお祝い金を残し、それ以外を社会奉仕として使おうとしている。ここにも知恵をみることができる。

《このごろ京にも随分困つてはるお方も多いと聞いている。で、わしゃこの金でできるだけ施しをしてさしあげたい》

茶金にとつても自分の商魂によらず、元値の三両が五百両に化けたのであるから、こうした知恵が浮かんだのであろう。

油屋については賢い知恵と愚者たるゆえの浅はかさを教えられる。

たかだか十文でしかない安手の茶碗も知恵の出方によれば、利益を生む。油屋は茶金の目利きの確かなことを知っており、二両で買い取った茶碗を茶金の店へ持ち込んで大金を手に入れようとする。利ざやを稼ごうという知恵である。

《あの茶金さんが指をさして、『この品は…』と言うだけで、黙つて十両の値打ちがある…》《茶金さんならこれ見て、千両、五百両と値打ち見てくれるねん》

鴻池善衛門が千両で買い取るときにも知恵がある。

茶金は、

《尊い方のお筆の染まりましたもの、お売りするというわけにはまいりません》

と、断る。

これに対し善衛門は金満家ならではの取引条件を提案し、買い取る。《ほんならその茶碗、うちに預からしてくれ。抵当にとつて、ほいで

千両貸そうやないか。お前はん、うちから千両借つてくれ。で、それをかたにとる、早よ言うたら質に置くのや。ほいで早よ流せ》

知識は持っているだけではだめで、知恵として利用されなければ価値はない。茶の洩れる小さな茶碗に千両の値打ちがあることを知った油屋はさらに欲張つて知恵を発揮しようとする。

《水がめの漏るやつを見つけてきた》

これが落ちであるが、論しても治らない愚者の懲りない性分を教えられる。

一補論

不細工な茶碗はなぜ千両に化けたのか。経済学で考える。この断は取引において評判の果たす役割が大きいことを教えてくれる。茶道具のように特殊な商品を取引する場合、その価値＝価格水準は売手と買手の「目利き」に依存しがちである。目利きとは商人が顧客から良い評判を受けて商いを続けていく過程で形成した自己の名声や「のれん」とも言える。商人にとつて守るべきは目利きに裏打ちされたこの評判である。

売手と買手のいずれかが商品の品質を十分に理解していない場合、いずれかの評判が品質情報として機能することがある。この意味において、評判は売手(買手)と買手(売手)を識別できるように機能する。よつて茶道具商人間の競争は評判やのれんの確立にあるとも言える。良い評判は高い品質を意味し、需要曲線を上方へ移動させ、より高い価格水準が付くこともある。

評判は目に見えないが将来、利益をもたらすものなので(無形)資産でもある。だから評判を確立するための投資費用は利益という形で回収できる。しかし不正直な取引や目利きがなければ、信用をなくし、

評判という資産を形成することもできない。このとき機会費用は大きくなる。

さて、この噺では茶碗の最初の売手は茶店の亭主であり、買手は油屋である。たかだか十文の値打ちしかないものを油屋は二両で買い取った。それは知れ渡っている茶金への評判によってである。

《日本一の道具屋…あの茶金さんが指をさして『この品は…』と言うだけで、黙って十両の値打ちがあるちゅうぐらいの人やで…ひよつとしたら千両ぐらいの値打ちもんやわからんさかい》

次に、油屋はこの茶碗を茶金の店へ持ち込む。売手は油屋、買手は茶金である。もちろん二束三文の代物と評価される。

《どこにでも転がっている、一番安手の数茶碗》

油屋は有り金二両をはたいて、茶碗を手に入れたいきさつをしゃべる。そして、茶金は油屋から自分の世間における評判を聞かされる。

《お前はんなあ、…せんど首をひねって『はてな』ちゅうて置いて行たんや、ええ。茶金さんともあるう人があんだだけひねくってんねん、こらえらい値打ち物やわからん》

《お前はんぐらいの人間になったらな、世間の者は皆知ってんのやで、どこで迷惑する奴があるかわからんのや》

これに対し、自分の評判、のれんを汚したくない茶金はこう答える。《言わば茶金という名前をかうていただいたようなもの。茶金、商人冥利につきます。あんたに損さしてはわしの気がすまん。この茶碗、わたしを買わせてもらいます》

茶金は元値の二両に手間賃の一両を加えた三両を油屋に支払って買い取る。たかだか十文の代物が評判によって三両に化けた。

この評判を確立するまでに茶金は多くの失敗をしたり、他人の失敗を見てきたのであろう、油屋にこう声をかける。

《山当てようてな気イ起こしたらあきまへんで。ああもう掘出物をしようとして長年、年期を入れた商売人が損するのがこの道や。地道におかせぎやす。それに優るものはなし》

評判を確立するには時間も投資費用もかさむが、回収できる可能性は低いので欲張らず、真面目に働けという教えである。

さらに、この茶碗に一層の箔を付けたのが関白や帝であった。関白は一首の歌を添えた。

《清水の音羽の滝のおとしてや、茶碗もひびにもりの下露》

帝は『はてな』と箱書きした。

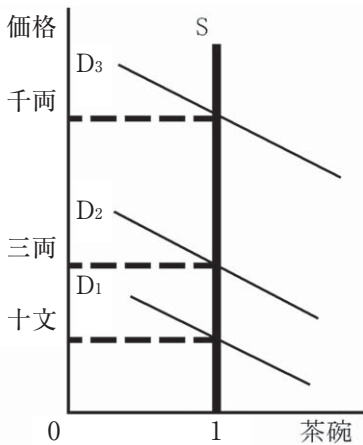
もとより傷もないのに茶が洩れる珍品、これに関白と帝からお墨付きを得て《えらい値打ち物》に化けてしまった。

最後に、鴻池善衛門が千両で買い取ることになる。

《その茶碗、わしに千両で売ってくれ》

こうして不細工な茶碗は三度化けて、千両の高級品となった。図1参照。

図1. 「はてな」の茶碗



四席

火焰太鼓かえんたいこ

古今亭志ん朝・京須偕充編(二〇〇四)「火焰太鼓」『志ん朝の落語5 浮きつ沈みつ』ちくま文庫。

夫婦はともに知恵者であるよりも場面ごとにどちらかがボケ役とツッコミ役を演じるのがちょうどいいようだ。助け支え合うということである。これを了解しあっている夫婦のところに良い運も巡ってくる。

すじがき

古道具屋の亭主(甚兵衛)は、品物が売れようが売れまいがかまわなという呑気者。一方、女房はしっかり者。

亭主は時代ものには価値があるという知識を活かして、今朝も道具市で古くて煤けた汚い太鼓を二分二朱で仕入れてきた。

《これ、時代がついてんだ、なア? うん。こういう古いものはな、ひよつとすると儲かることもあるんだ》

しかし、これまでに亭主が仕入れてきた時代もので売れたためしがないことから、女房はいつもの小言を聞かせる。

《店へ出しといたって売れやしないよつ》

丁稚の小僧に埃をはたかしていると、勢い余って、《ドンドンドンドンドーン》と音が鳴る。これを聞きつけた通りすがりのお殿様が興味を持ち、家臣が屋敷へ持参するよう命じる。

《ことによると、お買い上げになるやもしれんぞ》

これを聞くと亭主は有頂天になる。

《店へ出さか出さねエうちにもう売れちゃったじゃアね…》

この早とちりを諫めるよう女房はお殿様に太鼓が気に入られないと

きに亭主が受けるかもしれない罰をしゃべくる。手打ちにされるとも脅す。

ところが、太鼓は《世に二つというような銘器》で、火焰太鼓と呼ばれるものであった。見せるだけで、売れないと思いついて買ったが買ってくれることになった。思わぬ展開に気が動転した亭主は売値を家臣に尋ねるしまつ。

《:幾らぐらいなもんでしょう?》

仕方なく、家臣が進言する。

《遠慮なく、手いっぱい申してみよ》

というところで亭主は無理を承知で両手を広げ十両を示し、ここからどこまでも値切れと言う。これでは埒が明かないので家臣が三百両を提示し、これを亭主も受け入れる。

帰ってきて、女房に三百両を見せると、もつと儲きたい女房は、これからは音の出る物を仕入れるよう助言する。すると亭主はしたり顔で半鐘を仕入れて鳴らすと意気込む。最後に女房の知恵で、「落ち」となる。

《半鐘はいけないよ。おじゃんになるから》

(筆者注。おじゃんとは「フイにする」の意味である。)

一知恵

こと商売になると女房から邪険にされる亭主は自分と女房とがボケ役とツッコミ役の関係にあることをよく心得ている。がこの役回りは固定していない。

《女の利巧と男のばかと突つ支う(助け支えあう—筆者)てエのアな》

これで大商いができた。

女房は亭主が仕入れてきたものが太鼓と聞いて、知識をぶちまけ小言をしゃべりまくる。

《太鼓なんての、ア際物きわものといつてねえ、お祭りどきだとか、初午前はつぜんでなきゃ売れやしないんだよ。》

もつともな判断である。

女房から太鼓を屋敷へ持参しても《売れやしないよ。…売れないんだウ》と言われて亭主は《…じゃア、行くのよそうか》と女房の顔色を探る。女房は亭主の「売れた」という早飲み込みを《…少うし熱を冷ますために…》言ったんだと声音を下げる。心のどこかで仕入れ値を取り戻したいという気持ちがあるのであろう。さらにお屋敷での商いの仕方を教える。たとえ、お殿様ごうさまが買ってくれると言つても、口銭くちせんをもらわず、仕入れ値の一分二朱で売るようにと。決して、儲けようと思つて、これ以上の売値を口にしないよう諭す。これは粗相そそうがあつて命までは失いたくないという知恵である。

太鼓の本当の価値を知らない亭主は買手が希少価値のある銘器と言つているのだから、あえて元値を口にせずとも相当な買値がつくことを嗅ぎつけたのかもしれない。気が動転どうせんしているとはいへ、自分から売値を提示せず、無理を承知で十両から競り下げさせた。事実、商売人として女房を上回る機転、知恵も發揮している。

《かかあのやつア一分二朱で売つちまえてやん、よかつた（一分二朱と）言わないで》

また、目の前の大金に狼狽ろうばいしながらも亭主はしっかり商いをしていく。

《あたくしどもはね、いったん売つたものはね、決してお引き取りしないことなつております》

音の出るもので大金を得たことから女房は、さらに稼かせごととツッコ

ミを入れる。

《音がしたからだよ。今度つからはお前さん、音のする物ものに限るね》
それに対して、能天気のうてんきなままの亭主はボケを返す。

《そうよ、音だよ。おれ、今度アな、半鐘買つてきて鳴らすよ》

すると女房の絶妙な知恵が「落ち」として飛び出してくる。

《半鐘はいけないよ。おじゃんになるから》

〔補論〕

火焰太鼓はなぜ三百両で取引されたのか。経済学で考える。この噺は情報の格差から生じる経済問題の一つである。火焰太鼓が三百両で取引された背景には亭主と家臣とが持つ情報に格差(非対称性)があったからである。経済学では商品・サービスの価格は買手と売手の価格交渉力が一致するときに決まる、と説明する。亭主が仕入れた古道具市場では、太鼓の使用価値はあつても交換価値が十分に評価されていなかった。どこにでもある薄汚うすごい太鼓という情報のみが共有されていた。そのため亭主は売れるだろうという見込みだけで仕入れる。仕入れ値は一分二朱。

《これ、時代がついてんだ、なア？ うん。こういう古いものはな、ひよつとすると儲かることもあるんだ》

しかし、火焰太鼓のように希少性のある骨董品については売手と買手との間でその品質について同じ量と質の情報が共有されているわけではない。一般的には、売手が多くの情報を持つている。ところが、この噺では売手の亭主よりも買手の家臣のほうがより正確な情報《世に二つというような銘器》をもっている。このことから価格交渉をすれば、買手は有利な立場にいる。事実、買手の提示した買値で取引される。

保有する情報に格差があるような商品あるいは高額商品の場合、売

手も買手も留保価格をイメージして取引価格を交渉することがある。留保価格とは、買手にとって支払ってもよいと考えている上限の価格水準である。これを上回ると買わない。下回れば買う。売手にとって利益を生む最低限の価格水準である。これを上回ると売る。下回れば売らない。図2、3参照。骨董品のように価値を評価しづらい商品であれば、この留保価格は買手と売手との間で瞬時に一致することはない。交渉を通じて互いに相手の留保価格水準を探り合うことになる。

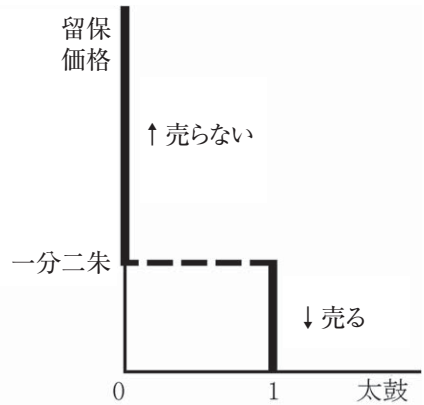
太鼓の本当の価値を知らない亭主はきつちり上限の一分二朱で売ってもよい。それ以上で売るともりはなかった。それは女房に小言を聞かされていたからである。

『お前さん、太鼓を売りに行くなんて了簡で行っちゃだめだよ。ね？太鼓を見せに行くんだと、ね。で、万が一、お向こう様で『道具屋、この太鼓はいくらだ』と言われたときに、お前さんね、そこで、また欲の皮突つ張らかして儲けようと思うってえとたいへんなこととなるよ。ねえ？』これは一分二朱で買ってまいりました。どうぞ、一分二朱でもってお買い上げをお願いします。口銭は手前ども、いただきます』と、こういうふうに言うんだよ。そうすりゃあ向こうだって、『ああそうか』ってんで、その気になって買ってくれるよ。それより高いってえと、あの太鼓は売れやしませんよ、ね？ うん。あアもう、だからとにかく、一分二朱でもっておつ放しちゃうんだよ、わかったかい？』

「雌鳥時をつくる」の譬えて、亭主は見せるだけの気持ちで交渉にのぞむ。

しかし売れないと思いついていたが、買ってくれることになった。太鼓の価値を知らない亭主は思わぬ展開に気が動転し売値を家臣に尋ねるしまつ。

図2. 亭主 (売手)



『：幾らぐらいなもんでしよう？』

仕方なく、家臣が手いっぱい商いの提案してくれる。

『お上に不忠にあたるが、商人というものは儲けるときに儲けておかつんと、損が不能でな、うん。：遠慮なく、手いっばいに申してみよ』

というところで亭主は無理を承知で両手を広げ十両を示し、ここからどこまでも値切れと言う。亭主はこれで買手の留保価格を探している。埒が明かないので家臣が三百両を提示する。これが買手の留保価格である。『お上に不忠にあたるが』からすると、少し高い留保価格水準だったのかもしれない。太鼓の価値を知らず、また損をすることはないので、亭主はこの価格を受け入れる。

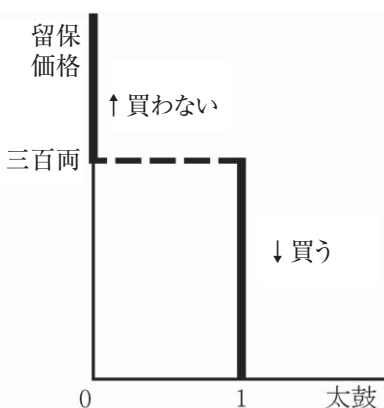
亭主は金を受け取ってから、太鼓の希少価値を教えてもらう。

『あたくしちよつとうかがいたいのは、あの汚い太鼓がどういいうわけで三百両で売れたんでございましょうな？』

『なんだ、そのほうも知らんのか。：なんでもあれば『火焰太鼓』と

か申して、世に二つというような銘器だそうだ》
これらの発言は明らかに情報の格差を表現している。

図3. 家臣（買手）

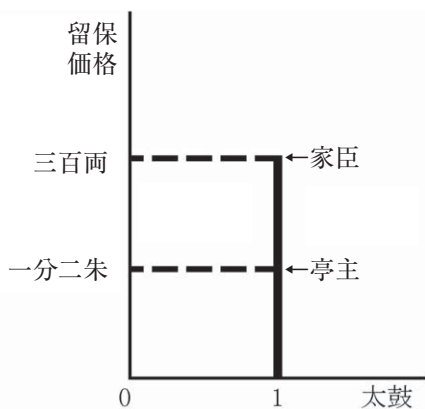


次に、情報の保有をめぐって生じる価格交渉の余地を考える。図4参照。家臣は古物商である亭主が太鼓の価値を当然知っているものとして交渉していた。しかし、もし家臣が亭主に古道具市場での仕入れ価格を訊くか、売値を亭主に提示させていたならば、亭主は上限の一分二朱を口にしたであろう。そのとき家臣は機会主義的に考えて、また買手独占者として一分二朱という価格で購入できたかもしれない。さらに、亭主には太鼓についての知識がないと予想して価格交渉することもできた。このとき家臣が《商人あきんど》という温情をかけるときに儲けておくと、損が不能いかんでな》という温情をかけないとすると家臣の留保価格水準はうんと低かったかもしれない。

一方、亭主が事前に太鼓の希少価値を知っていたら、需要の価格弾

力性は極めて小さく、供給曲線もほぼ垂直なので取引価格は無限大まで高くなりうる。亭主は売手独占者として三百両を上回る売値を提案できたかもしれない。

図4. 価格交渉



この状況になれば初めて買手独占者と売手独占者としての価格交渉力が問われたことだろう。そのため三百両が適切な取引価格だったのかどうかは分からない。もし、事前に亭主が火焰太鼓であることを知っていたら、家臣との間で情報が共有されるので、取引価格の水準は両者の交渉力によって決まったであろう。

価値があるという情報が共有されていないために、価格交渉力は情報を持つ買手が発揮し、買値が決まった。一見、亭主の行動は合理的でないようにみえる。がしかし亭主は費用をかけずに売値を見つけたわけであるから、また仕入れ値を上回る価格で商いができたのだから、損をしないという合理的な選択をしている。偶然ではあるが、情

報を持たない売手が情報を持つ買手の買値に従うことが合理的な選択となつたのである。

(筆者注。江戸には古道具屋が三八四三軒あり、一軒あたりの人口は一二六人だつたそうです。「山室恭子の商魂の歴史学」『朝日新聞』二〇一五年八月一日、土曜日より。)

五席 鰻の幫間うなぎのたいこ

古今亭志ん朝・京須倍充編(二〇〇四)「鰻の幫間」『志ん朝の落語5 浮きつ沈みつ』ちくま文庫。

どんな仕事にも知恵を必要とする。意地汚い知恵は身を滅ぼしかねない。口は災いの元、他人の懐金をあてにしたり、自ら品格を下げるような振る舞いはすべきでない。ただし、周到的な悪知恵には快感すら覚える。

すしがき

鰻の季節。野幫間のたいこの一八いっぽちが飯・酒をご相伴ごしょうばんにあずかろうと、客を漁あさっている。目ぼしい客には逃げられた。うろついていると親しげな顔をしてやってくる男の視線を感じる。

《ありがたいね、魚のほうから来てくれるとア…》

親近感を浮かべたその表情だけを頼りに、一八から声をかける。

《大将っ!》

姿形から男は一八が野幫間であることを見抜いているようだ。さも長い付き合ひであるかのような返事をする。

《どうしたい、師匠、元気かい》

その後、一八は何とか男との関係を深めようと、懸命に話題(以前一緒に飲んだ場所、自宅の在り処)を振るが、どうも話がかみ合わない。合うわけがない面識がないのだから。

男は名前も自宅すら明かさず、一八に追い討ちをかける。

《調子のいいこと言つてエ、ええ? 師匠、おれのことを忘れちゃつたんじゃねエか?》

にもかかわらず、一八は知つたかぶりをして一杯やろうと持ちかける。男は、何とか振り払おうとする。

《うるさいねエ、おい。何を言つてんだ。おれは浴衣がけで、こう手拭をぶらさげてんだ、ええ? これから湯に行こうつてんだよ》

下駄も擦り切れたボロをつっかけていた。それでもなお、一八はつきまとう。しかたなく、男は行きつけだという鰻屋へ連れていく。途中、目ざとく一八の下駄を褒め上げる。

《いい下駄ア履いてるね》

案内された鰻屋は造作も、もてなしも、かつ鰻も不味く、劣悪そのものである。それでも一八はヨイショをしながら腹を満たす。しばらくして男は便所へ立った。が、なかなか戻つてこない。仲居に聞けば、勘定と土産の鰻代は一八が払うと言ひ残して出て行つたと言う。

なげなしの十円札を払い、いざ帰ろうとすると一八の糸柱いとすゐの高価な駒下駄がない。男が履いて帰つた。じゃあ《あいつが履いて来た汚ねエ草履を出しな》と訊くと、《あれ、新聞紙にくるんでお持ち帰りになりました》と「落ち」る。

一知恵

この噺は野幫間の愚かしさと素性の知れない男の悪人ぶりがコミカ

ルに語られている。では、この男、本心から悪人だったのだろうか。悪知恵を熾熾させたのは一八である。知恵もないくせに、立派な姿形だけして、うるさく付きまとい、ヨイショでもって他人の懐金で腹を満たそうとする卑しい野幫間。そんな一八を男は《蟬だんだね》とまで言い放す。男は鰻屋へ誘った時点で一八の意地汚さに一泡噴かせてやろうと悪知恵を思いついたのである。この悪知恵は周到である。心地良ささえ感じる。初めて入る店を、そこが「つけ」がきくと思いつませるために《おれの行きつけの鰻屋》と騙す。部屋へ上がる前に土産の鰻を注文し、勘定は一八もちと伝え、自分の薄汚い草履は懐にしまい、一八の高価な駒下駄を履いてトンスラする。

一方、一八は脳ナシである。どだい湯に行く途中の者が鰻や酒への払いができるほどの金を持参しているわけがない。まったく状況が理解できていない。

本来、幫間の役割とは客人を笑わせたり、喜ばせたりして、その場を盛り上げることである。それには口を挟む絶妙な「息と間」が身上であろう。男のしゃべりは嫌われる、と言うが、一八も男にたしなめられる。本人も、これまで失敗してきたことを吐露する。

《どうも、んふつふつ。すぐこれン（しゃべりすぎる―筆者）なっちゃうン。どうしようもない、よくしくじるんですよ、これで》

男が店は《あんまりきれいじゃねんだア》と断っているにもかかわらず、一八は店の造りから、部屋の片付け、仲居の振る舞いにするまで、文句を言い立てる。あまりにも早く焼き上がった蒲焼にも客人の前で《早過ぎるじゃア…》と不審を口にする。勘定を自分で払うときでさえ、鰻、酒、もてなし、とあらゆることに毒づく。たとえ野幫間であつても人として、こんなことは、言わぬは言うにまさる、ではないか。

知恵がなければ、《どこの人だっけなあつ》と他人の懐金をあてにするべきではない。

（筆者注。幫間は芸者と同じく、特定の置屋に所属し仕事をもらう。所属先のない者を野幫間とよぶ。当然、生活は安定せず、この噺のようには悪賢い客を漁ってしまい、痛い目にあうこともある。）

六席 へつつい幽霊ゆうれい

古今亭志ん朝・京須借充編（二〇〇四）「へつつい幽霊」『志ん朝の落語5 浮きつ沈みつ』ちくま文庫。

なまじつかたんすかたんす預金よきんなんか残すもんじゃない。欲に溺れすぎるとしくじりやすい。災いを避けるには知恵と度胸も必要だ。バカは死んでも治らない。親の小言と膏薬こうやくは後から効いてくる。こんな教訓の詰まった噺である。

一すじがき

ある古道具屋に品物がよくて、すぐに売れるのだが、またすぐに返品されるへつつい（かまど）がある。返品される理由は夜中になるとへつついから幽霊が出てくることであつた。何度か売ったり返えされたりしたそのへつついをどうしても買いたいという男がやってくる。店主は妙な噂が立つと商売に障るから売らないでたき壊すと答える。男はたとえ変なことがあつても返品しないで自分で壊すから売ってくれ、と掛け合い、ただでもらうことになる。

《据えただけでもって辺りの様子ア変わっちゃったよ。これが（造った）

職人の技、ね？ 芸つてやつかア、なあ、いいねえ」

この男、博打ばちをして飯を食っているが、このところ運勢がよく、勝ちっぱなし。おまけに上等なへつついをただでもらって上機嫌なまま酒を飲み、寝込む。

夜中の丑三うしみつ刻どき(午前二時)、寝苦しくて目を覚ます。へつつかから幽霊が出てくる。度胸のすわったこの男、聞けば、この幽霊生きているときは腕のいい左官職人だった。博打好きで、亡くなった親からも小言を言い続けられてきた。借金で借金をつくるしまつ。

一念発起して、今夜限りで博打から足を洗おうと決心し、賭場へ行く。ところが、欲がなかったことが幸いした。

《一晚に二百五十両、勝っちゃたんです》

大金を持ち歩いては物騒だと考え、五十両は手元に残し、二百両を男がもらったへつついへ埋め込んだ、と言う。

それ以後、博打はやめたが、仕事もせず自堕落な生活をしていた。こんな生活じゃあ《お天道様ア許しちゃうくれねエですよ》、左官は酔っ払った勢いで溝へ首を突っ込んで死んでしまう。どこの誰とも知られず、ろくすっぱ、お経すらあげてもらえず、あの世へいく。しかし、へつついに入っている二百両が気がかりで成仏できないでいた。

そこで、男に相談する。

《あれ壊して、中から金出してもらいでんですよ》

男は壊してやるから、金を山分けしようと思ちかける。幽霊は泣く泣くこれをのむ。男が百両を取ると、幽霊は《今度はそっちの百両が気に残っちゃてねえ》と駄々をこねる。そして返せという替わりに博打を持ちかける。

《ここにあるこの百両と、その百両と、ここでひとつ、勝負しませんか》
しよせん、もらった金、男は受けて立つ。賽さいころは男がかけた半はんと

出て、幽霊は自分の百両を失う。それでも往生ちやうじやうまわ際の悪い幽霊は、もう一度、勝負してくれとせがむ。男はこう訊いた。

《おれのほうの目と出たらどうするんだ。おめえもう、付ける金がねえじゃアねえか》

すると、幽霊が答えて「落ち」となる。

《いや、親方ア、心配いりませんよ。あつしも幽霊だよオ、足は出さねえ》

一知恵

この噺は莫大な筆筒預金たすすよきんを残して孤独死する現代の高齢者にも当てはまりそうである。まさか「うらアーめエーシューヤー」と出てくることはないだろうが。左官には金を隠す場所としてへつついに埋め込むという知恵があった。そのいい腕を仕事に活かせないのが人の世の常である。博打に勝って人生に負けた、と言えようか。

男の知恵をみよう。返品が繰り返されるへつついを道具屋は売らないでたたき壊すと言う。男はたとえ変なことがあっても返品しないで自分で壊すから売ってくれ、と掛け合い、ただでもらうことになる。是が非でも欲しい物を手に入れるにはこうした掛け合い、知恵が必要だ。

次に、出てきた幽霊をドスの効いた声で恫喝どうかくする。

《なんでエ、てめえはアツ！》

《うらアーめエーシュー》と幽霊が挨拶すれば、《なにをツ？ うらめしい？ おれアてめえにそんなこと言われる覚えはねえツ！》

こう怒鳴り返す。度胸だけでなく、災いを避けるための道理になつた対応である。さらに幽霊がへつついを自分で割ることができないので男に頼むと、山分けするなら引き受ける、と掛け合ったのも相手の弱みにつけ入る立派な知恵である。

バカは死ななきや治らないというが、死んでも治らない者もいる。勝負事は欲が出るとしくじりやすい。元金は幽霊からまきあげたものなので、男は幽霊との勝負において欲はない。一方、幽霊は百両を取り返そうと欲がでる。生前、この金は欲がなくて手に入れたことを忘れていた。結局、この知恵が活かされず負けてしまうのだが。いずれにしろ、これでこの幽霊は成仏できたのだろうか。

七席 富久

古今亭志ん朝・京須倍充編（二〇〇四）「富久」『志ん朝の落語5 浮きつ沈みつ』ちくま文庫。

この噺は主人公の知恵というよりも、持つべきものは友人を教えてくれる。知恵がなければ友人が貸してくれるし、自分の代わりに発揮してくれることもある。それが真の友人である。ただし、自分にもそれなりの人徳を身に付けたい。

「すしがき」

幫間の久蔵は酒癖が悪く、鼠貞にしてくれていた旦那衆から出入りを禁じられている。食っていけず、方々に借金をこしらえていた。残りものには福がある。売れ残りの一枚の富札（鶴の千五百番）を半ば自棄気味になけなしの一分で買う。売人からは縁起のいいことをほのめかされる。

《すつきりした、いい番号だろ？ よくこういうんで（当たりが）出るんだよ》

当れば千両。富札を普段は手を合わせもしない大神宮の神棚に納め、

お神酒まで上げて願掛けをする。神様にべんちゃらさえ聞かせる。《もしあたくしに千両当たたらば、あアたに金無垢の鳥居を差し上げますからア》

そうは言っても、お神酒を下ろして飲み、そのまま寝込む。夜半、元の旦那の屋敷周辺で火事がおこる。長屋の友人に起こされ、見舞いに行けば出入りを許されるかもしれない、と教えられる。久蔵はすっ飛んで行った。その心意気が認められ、出入りを許される。これが嬉しくて、羽目を外すが、旦那の許しをうけ、見舞客が持ってきた酒を飲み過ぎ、また寝込んでしまう。

すると眼が覚めないうちに今度は自分の長屋が丸焼けになる火事にあう。旦那の家に居候していたが、いつまでも居られない。ご鼠貞を探し始める。そんなとき、富札の抽選日に神社の前を通る。すると自分が買った富札が当り札であった。

《張った声で》鶴のオ、千ンン五百ウウばアアアアアんっ！》

千両が手に入ると大喜びするも、富札は火事で焼けてしまっていた。一文ももらえない。気落ちしてふらふら歩いていると、鶯頭が声を掛けてくる。火事の際、久蔵の部屋から立派な神棚を持ち出したと言う。久蔵に千両の使い道を訊くと、まずは借金の支払いに当てると言うことで「落ち」となる。

《大神宮様のおかげでほうほうに払（祓）いができます》

「知恵」

友人が貸してくれた知恵で久蔵は助けられるが、それも久蔵に人徳があつたればこそである。

《お前さんは酒さえ飲まなきやアいい幫間なんだア、ねえ。いいお客様アたくさん持つてんのに、飲むってエとガラツと人が変わつちまう

からなア》

《いやあ、いい男なんだよ。いい男なんだけど、飲むってエとガラツと人が変わるんでねえ、…それでまあ困っちゃうところがあるんだア》
酒ごときで他人の期待を裏切っちゃいけない、人徳を下げちゃいけない、という教えである。

最初に知恵を貸してくれたのは長屋の友人であった。

《(火事―筆者) 見舞いに行ってみねえな、ことよるってエとしくじりが解消なほるかもしれねえよ》

本人もそれを悟り、すつ飛んで行く。行くと案の定、願いはかなう。
《よく来たなあ。忘れねえからこそ来てくれたんだ。なあ? (力強く) よオしツ、出入りは許すぞオ》

何とか手伝いをしようと葛籠つづら、火鉢しほち、針箱はりばこ、紙屑箱かみくずばこを担ぎ、持ち出そうとするが貧相な髷間の身体では火事場のバカ力など出るわけがない。旦那には空頑張りに見えても心中、喜んでいる。見舞い客がもってきた酒を久蔵が飲み潰れてもとがめない。

《今まで、あたしたちのことをね、本当に忘れないから来てくれたんだから》

たとえ教えられたこととしても久蔵にとって火事見舞いに駆けつけたことは、溺れる者は藁をも掴むから出た知恵かもしれない。信用を回復する絶好の機会だったと言えよう。

もう一つの知恵は鳶頭にある。久蔵の家が燃えるさなか、富札を納めた神棚を鳶頭が持ち出してきていた。鳶頭は縁起をかつぐ芸人としての久蔵の信心ぶりを褒めている。

《おめえもやっぱり、さすがア芸人だよオ。えエ? いいお宮があったねエ》

久蔵自身に人徳や信心がなければ、鳶頭が神棚を持ち出すという知

恵も發揮されなかつたかもしれない。

(筆者注。江戸の火事データによると九二三件が確認でき、延焼した町の数は延べ二二一七町だったそうです。「山室恭子の商魂の歴史学」『朝日新聞』二〇一六年二月十三日、土曜日より。)

八席 　　もう半分はんぶん

古今亭志ん朝・京須借充編(二〇〇四)『もう半分』『志ん朝の落語5 浮きつ沈みつ』ちくま文庫。

悪銭は不幸という代償をともなつて身に付くこともある。自分の不注意が他人に悪事を起こさせるきっかけともなる。大事なものは「もう半分」といわず全部しっかり管理したい。夫婦もいずれかの灰汁あじが強いと理不尽な行動をとってしまう。

二すじがき

千住せんじの通新町とおりしんまちにある夫婦だけで営んでいる居酒屋へ、毎晩やつてくる六十半ばの爺さん。元は店を構える八百屋であったが、根っからの酒飲みで身代を潰し今は天秤棒てんびんぼうを担ぐ出商人であきんど。この爺さん、いつも茶碗の半分の酒を飲み終わると、「もう半分」と言つて、また茶碗の半分を注文し、これを繰り返している。ある日、爺さんが忘れていった風呂敷包みを亭主が開けると五十両の大金が入っていた。亭主は届けてやろうとする。が女房はこの金を騙し取り、店を大きくするための資金として使おうと、亭主を言いこめる。そこへ爺さんが慌てて戻ってくる。この金は八百屋を構えられるよう娘が《自分から吉原

へ身を沈めて、五十両の金エこしらえてくれたんでござんす」と懸命に訴え、返してもらおうと食い下がる。

《後生だから返してくれ、(手を合わせ) このとおりだ。ね？ 大事な金なんだ。あれが無えつてエとあたしゃアね、生きちゃいられねんだから》ところが、夫婦は知らぬ存ぜぬの一点張りで、ついに爺さんを店からたたき出す。爺さんは恨みのこもった捨てゼリフを残す。

《ちきしょおう、お…、覚えてやがれエ！》

さすがに亭主は気がとがめ、金を持って、爺さんを追いかける。千住の大橋の真ん中で爺さんを見つけ声をかけた。

《お爺さあー！ーん！》

しかし娘や婆さんに合わす顔がないと悲観した爺さんは川へ身を投げてしまふ。

《亭主の顔をじつと見ていたが、見ながらいきなり欄干に足を掛けて、ドバーンってんで飛び込んだ》

夫婦は奪い取った金で店を改装し、他人も雇って繁盛する。初めての子宝にも恵まれた。がしかし、この赤ん坊の顔が死んだ爺さんにそっくりであった。女房はその顔を見たときにショック死する。乳母を雇って、面倒をみるが、雇うたびに辞めてしまふ。最後の乳母と添寝する赤ん坊を隣の部屋から見ていると、丑三つ刻(午前二時)になると、起き上がり、行燈用の油を横に置いてある茶碗に注いで、ペチャッペチャッと嘗めている。これを見た店主は驚きのあまり殴り掛かろうとする。

《こんちきしょー！ーん！》

すると赤ん坊は振り向いて亭主に向って茶碗を差し出して注文する。

《(かわいい声で) もう半分くださいいな》

「知恵」

女房の悪知恵がいかに発揮され、最後にその報いを受ける。一見、怖そうな噺であるが「落ち」からは滑稽噺ともとれる。

爺さんの酒の飲み方には意地汚く、しみつたれであるが故の知恵を感じる。

《いっばい(に) 計ってもらって三杯飲むよりはね、ええ、半分つつウ計ってもらってエ、え、六杯やったほうが、なんかア余計飲めるような気がするんですなあ、へえ。うー。これ、同じことでも、このほうが長く楽しめますんでね》

この知恵も身代を潰してから身に付けたのであろう。しかし、この知恵はあつても酒を飲んで、金を置き忘れ、ネコババされるようでは、いただけない。

金は娘が吉原へ身を売って得たものである。これも金を得る一つの知恵ではある。今であれば、大学進学を断念し、家計を支えるために社会人となつて働く孝行娘であらうか。

亭主が根っからの善人であることは噺家の口調にも現れている。「爺さん」と呼び捨てていたが、嘘をつきとおすのが苦しくなつて「おとつファン」お爺さあー！ーん！」と情を込めて丁寧呼びかけている。

善人であるが故に、亭主は女房の悪知恵にそそのかされる。その悪知恵はいかなく発揮される。亭主が金を返しに行くと言つと、女房は自分が預かるから安心しろ、と悪事を思いつく。

《あたしたち二人で知らない知らないつてや、それつきりじゃないかあ。えエ？ この金もらえるんだよ》

さらに亭主に対して正直者だからうだつがあがらないとまで説教する。

《嫌だね、本当にイ、…正直めッ！》

一方、亭主はこつこつ貯めた金で店を大きくしようとして諫める。

《道ならぬエことした金でもって何やったってうまくいくわけアねエよオ》

すると、女房は渡世観を吐露する。

《何を言つてんだよオ。：『長い浮世に短い命』だよ、ねえ？ 太く短くつてことがあるじゃないか、ねえ？ ん、呑気に暮していこうじゃないか》

騙したことを亭主が後悔し始めると、同じ穴なの貉むじなと決め込む。

《娘が女郎になりヤア、またア娘は娘でもって、客のことを騙すんだ。同じだよオ》

爺さんが身を投げたと訊いても平氣の沙汰である。

《あらつ。へえーえ。世話アなくつていいや：そんなこといちいち心配することアないよ》

でも、よくよく考えてみると、この斬は爺さんの不注意が夫婦に悪事を起こさせるきっかけとなっている。その不注意の原因はもう半分、もう半分の酒、酒、：酒であった。

九席

黄金餅こがねもち

古今亭志ん朝・京須偕充編(二〇〇四)「黄金餅」『志ん朝の落語5』

浮きつ沈みつ』ちくま文庫。

袖振り合うも他生の縁が大金をもたらすこともある。人間、何かに(悪であれ、善であれ)染まるときはとことん染まりきるべきである。そこから壁を越えることもできる。悪銭は使いようによっては身に付くこともある。

一すじがき

下谷の棟割長屋むねわりながやに西念さいねんという坊主とその隣に金兵衛きんべえという嘗め味噌売りが住んでいた。坊主は宗派を変えてでもお布施をもらおうとするし、病気になつても治療代、薬代すら払いたくないという「ケチ」で金に執念深い。ある日、体をこわした西念を金兵衛が見舞いに来る。何か食べたいものはないかと聞くと《あんころ餅が食べたいン》と答える。金兵衛が買ってきてやるから金を出せと訊くと、《あなた見舞いに来たんですから、：あなたア、出してくださいなア》とケチなことを言う。仕方なく、金兵衛は自腹で買ってくる。すると、金兵衛に帰れと言う。

《あたしヤア、他人が見てるつてエと、食べられない性質なん：》

外の壁穴から覗いてみると、胴巻きから大量の一分金、二分金を出し、それを餅に詰めて一個ずつ飲み込んでしまった。

《野郎、もういけねェんだよ。：金に気が残つて死にきれねんだア》

が、七転八倒の苦しみよう。慌てて、金兵衛が飛び込み、懸命に声を掛ける。

《嘔吐もどしな嘔吐しなつ：おい、一粒でも二粒でもいいから、ここへ吐きなつ》

西念はそのままあの世へいった。

すると金兵衛は西念の腹の中にある金をせしめてやろうと、大家と長屋の連中を言いくるめ、夜のうちに遠路、自分の寺へ死体を運ぶ。弔いのお経代も自腹で払い、長屋の連中を先に帰して、死体を担いで、焼場へと行く。隠坊おんぼうには腹の部分を生焼けにしると言いつける。翌朝、骨揚げも自分がすると脅しつけ、西念の腹から金をすべて拾って帰る。この金を元手にして目黒に餅屋を開き、たいそう繁盛したと言われ

ている。この噺は「『黄金餅の由来』でございました」と、終る。

〔知恵〕

一見、「落ち」のない噺であるが、餅の中から出てきた金を奪って、それで餅屋を開いて繁盛したというサゲになっているので、餅と餅屋を掛けているとも読める。人情噺、滑稽噺、恐怖噺、執念噺のいずれともとれる。西念と金兵衛の欲の深さを本旨とすれば、執念噺と読むべきであり、その執念に知恵がある。なお西念が化けて出れば、「へっつい幽霊」に似た噺となる。

西念はトコトンしみつたれ、ケチで金に執念深い。それを簡条書きにしてみる。

お布施をもらうためには宗派を変えてでも《南無阿弥陀仏》《南無妙法蓮華経》と念仏を唱える。

身体をこわしても治療代、薬代を払うのが惜しくて、医者にはかからない。

食べたいというあんころ餅を買う金を見舞いに来た金兵衛に出させる。その餅に有り金をすべて詰めて飲み込んでしまう。

それを見ていた金兵衛に愚痴らせる。

《いろいろ長いことお世話になったんだから、『どうぞ金兵衛さん、お使いください』って、こつちイ寄越しゃいいじゃねエかなア》

死にそうになってもそれを吐き出そうとしない。決して、自分の金を使おうとしないところは知恵者である。もっともそれで命を落としていたのでは褒められないが。

次に、金兵衛の執念を簡条書きにしてみる。

金を一人占めしようと死んだ西念が金を飲み込んだことは誰にもしゃべらない。そして焼場で骨揚げするときにそっくりいたたくこと

を思いつく。

死の間際、西念から用いをして欲しいと頼まれたとウソをつく。そして自分の寺で用いをする。

無駄な出費を避けるため、早桶を買わずに菜漬樽へ死人を入れる。長屋の連中には夜のうちに寺まで運ばせる。

お経が終ると長屋の連中を帰し、自分一人で焼場まで死人を担ぎ運ぶ。骨揚げを自分一人でするためである。

金が溶けてしまつては元も子もないので隠坊には《故人の遺言ほとけゆいごんなん

だい》と言つて腹をあまり焼くなど注文する。
《故人の遺言でな、他の者に骨を触らしちゃ嫌だつてんだ、なアツ。万事、おれが任されてんだ。おれがやるんだ》

こう言つて、骨揚げは自分でやつてしまう。こうして死人の腹から金を取り出すことに成功する。

他人を傷つけない悪知恵を遺憾なく發揮している。こうした知恵が他に回れば、成功するのも頷ける。

西念と金兵衛の執念深さの違い。西念は身を滅ぼす単なるケチである。金兵衛は出すものは出すという合理性をもっている。病気の隣人を見舞う気遣いもする。餅を自腹で買ってやる。和尚に文句を言いながらも用い銭（天保銭六枚）を出す。どちらも執念深いが見舞う金を活かして商売に成功した金兵衛が意味のある執念を發揮したことになる。悪知恵も使うところを間違えなければ、自分のため他人のためにもなる。

ところで肉親のない死人の腹から出てきた金は誰に帰属するのか？ 骨揚げで拾い上げれば、遺失物取得になるのかな？

十 席 宿屋の富

古今亭志ん朝・京須借充編(二〇〇四)「宿屋の富」『志ん朝の落語5 浮きつ沈みつ』ちくま文庫。

嘘八百というが、人間、おかれた状況を悲観せずに大法螺でも吹いていると運が舞い込んでくることもある。法螺を吹いてその場をやり過ぎす、という知恵である。大法螺を吹ける者の賢さとそれを信じてしまう者の愚かさと思う。

二すじがき

日本橋馬喰町の貧乏宿屋へ来た客は主人に《何かかまってくれちゃ困るよ》と一切「かまわないでくれ」と言う。訊くと、自分は大金持ちで小さい頃から店の奉公人や他人からかまわれてきたので、かまわれるのがうっとうしい、と答える。かまわれたくなくてわざと薄汚い服装をしている、とも言う。

金持ちであれば、溝に金を捨てても平気であろうと、主人は副業でやっている富札を、一枚一分で千両当ると売りつける。客は《当るのは困るな、…万が一当たったらだよ、ね、半分の五百両、お前さんにやろう》と約束する。

しかし、実はこの客はからつけつの貧乏人でこの一分も最後の有り金だった。大金持ちと法螺を吹いておけば《宿賃の催促には来ねエだろう。ええ? 飲むだけ飲んで食うだけ食ってずらかっちゃおツ》という魂胆であった。

次の朝、近所の大名に貸してある三百両をまだ返さなくてもいい、と告げに行くとな法螺を吹いて宿を出る。湯島天神の境内には富札の当

選番号が貼り出されていた。それを見ると客の札が一等で千両当っていた。客はパニックになる。主人との約束を悔やむが、売った人がいないとお金をもらえないので逃げるわけにはいかない。宿へ帰り寒気がすると行って布団にもぐり込む。慌てて主人も帰り、祝杯をあげようと客の部屋へ入る。ここでも大法螺を吹く。

《何が祝いだ。本当に、ええ? それつばかりの金で祝いなんて、とんでもない話だ》

ふっと主人の足元をみる。

《お前、下駄ア履いて上がってきたな》

どうしても一緒に祝杯をあげたい主人が布団をめくって「落ち」となる。

《お客は草履を履いて寝ていた》

一知恵

よくぞまあ、これだけ大法螺を吹けるものだ、と感心させられる癖である。客が大法螺を吹く理由はいたって単純である。

《どこ行っても俺のことをばかにしやがるから、ちよいとおどかしてやれと思っただけなんかな》

金がないので悪知恵から法螺を吹いていた。

《あれだけ大きなこと言っただけだから、当分の間、宿賃の催促には来ねエだろう。ええ? 飲むだけ飲んで食うだけ食ってずらかっちゃおツ》

主人の愚かさにも気づいている。

《どういう育ちをしてんのかね、あいつア。やに俺の言うことを素直に信用する野郎…少しや疑るがいいじゃねえかな》

また、法螺から一分金を失費したことを後悔している。

《人間なんてえのは大きなことを言うもんじゃねえってえが…》

すべて貧乏から生まれた法螺であった。

大法螺を幾つか簡条書きにしてみよう。

《あたしのね、身の回りの用をする人間だけでも五、六十はいるんだよ》

《どこ行っても粗末な扱いを受けてねえ。あたしや、もう、今はせいせいとしてるんだア》

《あたしは何もしてないけれども…うちには、もう金があり余つてんの。ねえ？ 金蔵がいつばいなんだよ》

《あれだけ大勢奉公人がいるんだから、中には手癖の悪いやつがいて、少しこ金をくすねるとかなんとかしてくれりゃいいんだが》

《女中が菓を漬けるんでね。『どうも沢庵石はゴロゴロしてて坐りが悪くていけない。何かいいものはないかしら？』なんて話してるから『じゃ、どうだい。お前方、千両箱の十も載せといたら』ってそう言うてやつたんだ。…そのうち出入りの職人がね、少しずつ持つてつちやつて、もう今じゃ一ツ箱もないよ》

《夜中にね、泥棒が十五、六人入ってきてね、…金が欲しいんだろ？

金だつたらいくらでもやるんだから…金蔵へ連れてって、みんな鍵開けてやつてさ。…千両箱たつた八十しか持つてけねんだあつ》

《なんだい、その『富』てえのは？》《当るってえと、…お、千両！こつちからやるの？》《千両もらつてごらん、邪魔でしようがないよオ！》《まずい物のほうがいいよ。…うん。近頃まずい物がうまくてしようがないんだ。…お金があるんだからツ。(大声で) 金があつて困つてんだよーオツ！》

こんな大法螺は吹いたが、五百両を手に入れたのだから、《飲むだけ飲んで食うだけ食つてずらかつちやおツ》ってなことはしなかつたであらう。

(二十二)

貧乏であるが故に、大金持ちであつたらば…あつたらば…という法螺から出てきた駒とでも言えようか。真面目に生きていると大法螺を吹けば罰に当たりそうな気持ちがある。真似をしたいとは思われないが羨ましいかぎりである。でも、大法螺が吹けるのも一つの知恵と認めたい。

十一席

三方一両損

古今亭志ん朝・京須借充編(二〇〇四)『三方一両損』志ん朝の落語 6 騒動勃発「ちくま文庫」。

失敗は次に良い成果を得るための捨石である。出世や金よりももっと大切にしたいものがある。それは、誰にも犯されない純な心である。じゃあ、自分はどうか生きるのか。

一すしがき

ある日、神田白壁町に住む左官の金太郎が柳町で財布を拾う。中を改めると、神田小柳町大工吉吾郎の書き付けと印形(印鑑―筆者)、それに三両の銭が入っていた。金太郎は親切心からわざわざ吉吾郎の家へ届けると、吉吾郎は自分が落とした財布であることは認めるが、書き付けと印形は受け取つても、銭を受け取ることは迷惑千万だと云つて、頑なに断る。

《印形と書き付けはおれの物だい、なあ？(それだけは受け取るが)金はいらねえや。(金を残して財布を放り)…てめえにやるから、帰りに一杯やれエ》

すると、金太郎も負けてはいない。

《こんちきしよう、何をしゃがんでえ。おれアな、礼をもらおうと思つておめえんとこイ届けに来たんじゃねんだぞオ。えエ？ おめえが困るだろうと思うから持って来てやったんだ。なんで受け取れねんだい》
 こうして押し問答の末、吉吾郎が先に手を上げ、取っ組み合いの喧嘩となる。ついには二人の大家の取り成しで奉行所にて決着をつけることとなった。

処は南町奉行所。大岡越前守が双方の言い分を吟味するも兩名とも三両の金はいらぬ、と言ひ張る。そこで、大岡はこう裁きを下した。
 《…この三両の金子、…越前が預かりおく…そのほうたちの正直に愛で、越前が二両ずつ褒美としてつかわす…》

つまり、越前が三両に《一両足して、二両ずつつかわした。これすなわち『三方一両損』と申す》

この裁きは大岡が一両のを出金をして職人たちの頑な実直さに報いるという天晴あっぱれな裁きとして、しばしば取り上げられる大岡政談の一つである。

裁きの後、大岡は御膳を用意させ、
 《兩人の者いかに空腹じゃと申し、あまり食しやすでないぞ。腹も身の内じやと氣遣うと、

《(応えて二人が)へえ、心配御無用。多かア(大岡)食わねえ》
 《たった、一膳(越前)》
 と、「落ち」がつく。

〔知恵〕

この噺は大岡裁きの部分が美談として語られがちである。また、江戸時代の職人(大工や左官)たちの金銭感覚「江戸っ子は宵越よいこしの銭ぜには持たない」を語るときにも取り上げられている。腕に自信のある職

人たちは「金は腕の中に入っている」ので金が欲しければ、仕事をすりゃあいい。現金はいつでも手に入る(そのため吉吾郎にとっては三両も大金ではないようだ)。なまじつか残して余計な心配などすることはない、ということである。

それではなぜ、トラブルが美談にまで発展したのであろうか。それは吉吾郎と金太郎の金銭感覚というよりも人生観に根ざした知恵にある。

三両の銭を落とした吉吾郎の人生観。
 金太郎が親切に届けても、

《金を落としてさばさばとしてエ、あーア、これでもつてエ厄やくばら払いだなど思つて、ありがてえつてんで、今おれは飲んでんじゃねえかア》
 と、銭を受け取らない。

さらに説得されても受け取らない。

《それア、以前もとアおれの金だつたア、以前アなア、うん。だけでも、いったん懐かたから飛び出したんだア、二度と敷居しきいをまたがせねえんだ》

ここで注目したいのは銭を落としたことを厄払いと捉えていることである。わずか(?)三両の損ですんだ。三両で厄を払うことができたと、という失敗を失敗と捉えずに、ポジティブな諦め方、不幸中の幸い、として了解していることである。それを祝つて、酒盛りすらしている。

厄払いに使つた三両と考えれば、たとえその金が舞まい戻つたとしても二度と懐へ仕舞うほど、了簡は狭くない、ということである。また、持ち主に断りもなく、懐から飛び出した銭に未練などない。これはまるで親の意見を見無視して、家から飛び出した息子には二度と敷居を跨またがせないという思いを自分の銭に込めている。まるで汗水流して手に入れた銭に裏切られたとでも言うかのように。裏を返せば、それほど稼いだ銭に愛着があつたということでもあろうが。

いずれにしろ失敗をこう理解する知恵があれば、人生は明るい方向

へと展開することだろう。

金太郎の人生観。彼も生粋の職人である。吉吾郎から、

《…金はいらねえや。…てめえにやるから、帰りに一杯やれエ》

と、あしらわれても、

《そんな金もらうぐらいだったら最初はなっから届けねんだア…》

と遣り返す。

大岡の、

《そのほう、その折、なぜ、(三両を―筆者) もらいおかなかった》

という問いかけへの返答には金太郎の職人気質を支える人生観が窺える。

《はばかりながらあつしアねえ、そんな三両ばかりの金をもらって、え？ ねこばばするような、そん―なさもししい了簡を持つてるんだつたら、疾うちの昔むかしにこつちアねえ、(涙をすすつて) 立派な親方ンなつてるんでエ、ええ？ (男泣きしかけて) こつちア、生涯親方なんぞにはなりたくねえ、人間というものは、出世するような、そんな災難に遭いたくねえと思やこそ、(ついに男泣きし、合掌のかたちをして) あつしア朝晩、神棚に手を…》

出世イコール上位への役職(親方)イコール金儲け。まるで余計な出世を望めば、職人としての腕に錆びが付くことを怖れたような発言である。出世を望めば、心の隅にさもししい了簡がはびこってしまう。それを懸命に断ち切ろうともしている。

出世することを「災難」と言い切る。これは出世する者たちのさもししい金欲を垣間見てきたからであろう。確かに出世をしたといわれる者の中には責任もとらず、ネコババしか考えない輩がいるものだ。

金太郎にとつて、出世、役職、金なんてものは二の次、三の次のことであつて、そんなことよりもっと大切にしたいもの、すべきもの

が人にはある、つてことを教えてくれているように思う。それは金では買えない「純な心」を持つということであろうか。立身出世をこう理解できるのも見聞から得た一つの知恵であろう。

この断からは失敗したことへのポジティブな諦め方と出世や金よりも大切にしたい、誰にも犯せない「純な心」が自分には備わっているのか、いないのかを考えさせられる。じゃあ、自分はどうか生きるのか。

三、締めのご挨拶

本稿で取り上げた古典落語はどれも主人公がこつこつと金を貯めるタイプの人間ではありませんでした。簡単に稼げたり、偶然、手に入れた大金に一喜一憂するどこかすき間のある人間たちでした。そんな人間たちの心理や振る舞いに可笑しみや面白さがありました。と同時に、そこから生きていく上での知恵を探ることもできました。この知恵は断ごとには違いますが、一括りにはできません。聴き手、読者が断を聴いたり、読むことで感じ取るしかありません。

これらの断のうち、筆者は「三方一両損」に登場する吉五郎や金太郎の生き方に共感を覚えます。とりわけ「出世を災難」と言い切る金太郎の知恵には思わず、周りを見回しました。組織の中には役職を振りかざし、部下に首を縦に振るよう強要してくるさもししい上司、輩がいます。いますよねエ!

最後に、筆者が創作した小断を紹介して、締めのご挨拶に替えさせていただきます。

小断「ATM」

これは私がウーンと若い頃に滞在したことのある外国での話なんで

すがねエ。日本を出国する際に、一カ月分くらいの生活費を現地通貨で持って行ったんですよ。その現金がなくなると、日本の銀行で作ったキャッシュカードで現地のATMから現地の通貨を引き出してたんですがねエ。もちろん、自分の口座にも入金できます。このATMですけど、フルネームをご存知ですか? Automated Teller Machine。直訳すると、機械が自動的にしゃべるってことですが、現金自動出入機って呼ぶんですねエ。これは本当に便利な機械ですよ。あア、それで滞在中は面白い体験を幾つかしました。一カ月を過ぎたある日、買物をしてお札を差し出すと、それを手にした店員が怪訝な顔付きをして、突き返してきたんですよ。

「これはニセ札だから受け取れない」

私は一瞬、哑然としたんですが、財布から別の同じ額面の札を出して、渡したんです。すると今度も突き返されたんです。焦りましたよ。さらにもう一枚出すと、ようやく受け取ってくれて、間違いなく釣銭ももらったんですけどオ、不思議な思いが消えませんでしたね、現地の友人に、突き返された札を見せました。すると彼はニヤニヤ笑い、手にしてすぐにこう断言しましたア。

「これはニセ札だよ」

訳が解らず、私は訊き返しましたよオ。

「どこを見てニセ札と判るの?」

彼は私の顔の前へその札を持ってきてですねエ、スカシのところを見せて、指先で撫でてみるって言うんです。そして、こう付け加えました。

「ガサガサしてないだろ。気をつけたほうがいいよ。この国では大量に出回っているから」

そう言われても、ねエ。現地のATMで引き出したお札ですから。

英語をしゃべることでは苦労しませんでした。この見分け方のほうが難しかったですねエ。えエ。困ったもんです。はい。

それで、財布の中に残した数枚のニセ札が心配になったので、翌日、このニセ札を銀行のATMで自分の口座に入金してみたんです。すると何のトラブルもなく、取引明細書には入金印字されて残額も正しいですよ。ホッとしたもの、不安は消えませんでしたけどね。腑に落ちなくて、また友人にしゃべったんです。すると、彼はそのときもニコニコ笑って、こう言ったんですよ。

「この国じゃア、そんなことは日常茶飯事だよ」

それから数カ月後の日曜日に新聞を読んでいたらですねエ、トップページに出てましてねエ。『ついにニセ札作りの名人、逮捕される』っていう記事が。この犯人は大量に作ったニセ札を大量に自分の口座へ入金したそうです。それまでは小額の入金だったので足がつかなかったようです。これを読んだときも理解に苦しみましたよ。私は、えエ。今から思うと、あの当時、あの国ではATMのTの役割が違ってたんでしょうかねエ。きつと、Transformerだったんでしょうねエ。おあとがよろしいように。

〔落ち〕への筆者注。Automated Transformer Machine、現金自動変形機。)

参考文献

- 集英社(二〇一六)「特集 落語がこんなに面白いとは」『すばる』集英社、一二五―一六六頁。
- 中込重明(二〇〇四)『落語の種あかし』岩波書店。
- 落語日和編集委員会編(二〇一四)『落語日和』山川出版社。

